谷戸の風 ㊼

夢がうつつか、うつつが夢か

山内静夫

三月場所が終わった。年六場所、隔月だから早い。この稿を書き出してから何年になるか。相撲のことは随分書いたような気がする。

この所しばらく取り上げなかったが、あまりいい話題がないからかもしれない。それで古い話を書くことにした。

記憶が少々怪しい気はするが、お許し願っておく。私にとって最も古い記憶だと思う。

多分七、八歳の頃だと思う。天龍という力士がいた。関脇位の力士で人気はあったのだろう。この力士が相撲協会に反旗を翻して、脱退事件を起こした。かなりの数の力士が動いたのだろう、大問題となった。

正確な時期の記憶はないが、私の記憶の中にこの脱退力士の角力を見た記憶があるのだ。

この記憶を信じなければ始まらないのであるが、この幼少の私の記憶の鮮明なことが時を経るにつれ色あせてくるのだ。そのあたりが逆に怪しいと思われそうだが、私の中ではますます現実味をもったイメージとして広がってきている。

天龍という力士の立姿、どこかわからないが、国技館でない場所で小屋がけ風の会場など、間違いなく現実なのだ。

手元の資料を調べればすぐわかる事なのだが、年と共に手早い行動が出来なくなってしまっている。私の中では現実であってほしいという思いがきが時代を変えて行くのかもしれない。

ふと現代の角界に気持ちがもどった。貴乃花に天龍の姿がだぶった。いつの時代でも革新の力が動くものなのだろう。天龍の行動も成功はしなかった。しかしこうした動きは、今日の角界にも見事に演じた。

佐藤碧さん（小学4年）は「足の動かし方とかが難しくて、最初はできるかなと思ったができるようになった。能は見ているよりやる方が楽しい。今日は練習以上にうまくできた」と満足気だった。

稽古は昨年7月中旬から今年3月まで月2回ほど全19回同能舞台で行われ、指導は同能舞台主宰の中森貫太・健之介親子があたった。市では今後、「こども能」を鎌倉に定着させていくことを考えているという。

木版画　藤本宿

伝統文化と親しもう
「鎌倉こども能」発表会

子どもたちに日本の伝統文化に親しんでもらおうと鎌倉市が開いた「鎌倉こども能」の教室に市内在住の小学校4年生から中学2年生まで11人が参加。3月17日、長谷の鎌倉能舞台で発表会が行われた＝写真。

演目は源頼光伝説を題材にした「土蜘蛛」で、能の豪華絢爛な装束に身を包んだ子どもたちが厳かに登場し、プロの奏でる笛や太鼓、地謡にのせて長いせりふを堂々とのべた。シテが白い蜘蛛の糸を放つ立ち回りも

保護観察者の就労支援
鎌倉市

保護観察対象の20歳以下の人に就労の機会を提供し、自立支援を促すことを目的に鎌倉地区保護司会（木村由利子会長）と鎌倉市が3月5日、就労支援に関する協定を締結した＝写真。

市は同会の推薦する保護観察対象者に4月以降、就労の機会を提供する。県内では、川崎市、県に次いで3例目となる。

松尾崇鎌倉市長は「地域で温かく迎えられるよう鎌倉が目指す共生社会まちづくりに繋げたい」と述べ、木村会長は「立ち直りには住居や就労が大切。民間の協力も必要で、温かな眼差しで犯罪のない社会の実現を目指したい」と話していた。

国際婦人デーキャンペーン
ソロプチミスト鎌倉

女性の権利と世界平和をめざす3月8日の「国際婦人デー」に合わせて、国際ソロプチミスト鎌倉（立川裕子会長）のメンバーら6人が鎌倉駅前でチラシなどを配って啓蒙活動を行った＝写真。

国際婦人デーは1975年に国連が制定した記念日で、女性への差別撤廃と女性の地位向上を訴える。国際ソロプチミストは、世界123か国で活動する女性のボランティアネットワークで、日本では女性と女児の生活を向上させるという使命のもと活動している。

立川さんは「関心をもってもらえてよかった。意識の向上につながれば」と話していた。

20周年記念誌完成
図書館とともだち・鎌倉

図書館友の会として活動する市民団体「図書館とともだち・鎌倉」（和田安弘代表・会員135人）が昨年20周年を迎えたのを記念して作成した記念誌が3月中旬完成し、配布されている。

同会は、本が好きで図書館が好きで鎌倉の街も好きな7人のお母さんたちが集まり、鎌倉の図書館を楽しく便利に使いこなそうと1998年に発足させた。子どもたちへのおはなし会、学校図書館学習会、読書会、朗読会などの活動を行い、市との協働事業で講演会や図書館まつりほかさまざまなイベントを企画、2011年の鎌倉図書館開館百周年記念事業では記念誌の発行の提案と編纂などにも携わった。

記念誌は、50余人から寄せられた図書館への思いや期待、要望などの寄稿文と、20年のあゆみ、活動を項目別にまとめたもの、図書館の在り方についての提言などが載せられている。

和田代表は「多くの方々のご寄稿に感謝し、そのつながりを感じた。自分たちもこの20年を振り返る機会となってよかった」と話している。

記念誌は市内の図書館などにも置かれている。問い合わせ黒瀬さん☎0467・22・8545

記念誌を手に図書館とともだち・鎌倉の世話人たち

文学つれづれ ㉛
翁と乙女（十三）

赤羽根龍夫

ここでシテの翁が扇を広げて立つと、三番叟も立ち上がって扇をひろげて二人が向かい合う対面の形をとる。

本田安次が『翁そのほか』で各地の祭りの翁と比べて言っているように翁にこの対面があるのは、勿論深い意味があってのことである。即ちこれは、五穀成就、千歳万歳の感染呪術を先ず行うもので、今さりげなく演じてはいるものの、もともと重要な部分であった。

野上豊一郎は猥雑だから宗教的でないと考えたが、本当は「翁」がいかに厳粛に演じられようとも、この性交を暗示する部分が翁の翁たるゆえんであったが為に取り除くことが出来なかった「翁」のポイントなのであり、まさにそれ故に翁が神事であったことを示しているのである。

対面のあとシテの翁は正面を向き、「天下泰平国土安穏」と謡いつつ万歳楽を舞う。翁の舞を舞い終えたシテがおごそかに退場すると、舞台の調子は一変し、三番叟が「あゝ」という掛け声とともに走り出る。

おおさいや、おおさいや、喜びありや、喜びありや、この所より外へはやらじとぞ思う。

この揉三段と呼ばれるスピードのある舞いを舞った後、三番叟は舞台の後ろで黒い翁面（黒色尉）をつけ、面箱持ちと向かい合って狂言問答をわざと大げさにおかしくした後、面箱持ちより鈴を渡される。

一人残った三番叟は、鈴と扇を持って種播きのしぐさともとれる鈴の段をにぎにぎしく舞って「翁」の全局が終わるのである。

大償神楽の三番叟

この三番叟は翁のもどきであると言われている。もどきというのは、同様な演じ方をややくだいて、あるいは滑稽に演じるものである。

しかし私は「翁」は、もともとは三番叟が演じたものだと思っている。1129年（大治四）5月10日に八条殿で行われた田楽に、散楽者が「大鳥帽を着て、田畝に立って事を行い、破れ唐笠を持てる者一人相従う」（長秋記）とあることによっても分かるように、猿楽者は田楽の中で滑稽な翁の役を受け持っていた。前述したように田遊びの中から田楽が生まれた時、中国伝来のさまざまな芸能が加わった。

田楽は船来の目新しい芸を受け持ち、田遊びの翁のもどきは土臭いものとして一段と低い芸能集団である猿楽者たちに受け持たせた。しかし、田楽における《もどき》を受け継いだ時、本当は芸能の本流を受け継いだことになったのである。

世阿弥が「遊楽の道は一切物真似なり」と言った時、勿論彼はそう言うことで滑稽・物真似を表現とする猿楽の卑しい過去を振り捨てようとしたのであるが、芸能の本質を正しく言い当てていたのである。神のものまねということが神事としての芸能の本質だからである。田遊びの神事の翁を猿楽者がおもしろおかしく演じた。

猿楽の翁は元来もどき役であったのである。だから本当はもどき役であることにコンプレックスを感じる必要はなかった。

能楽の当初の名であった猿楽が田楽と結びつく前は、中国伝来の曲芸・幻術・滑稽物真似を表芸として、他の芸能よりは一段と低い芸と見なされていた。だから翁のもどき役を受け持った時、翁の神聖性は積極的に受け入れたが、翁の滑稽性やもどきを受け入れるのは以前からのコンプレックスを助長するようなものであった。しかし、またもどきである物真似芸こそが猿楽が民衆に受け入れられた芸でもあった。そこに猿楽の自己矛盾があった。

（神奈川歯科大名誉教授）

小学生探検隊
地元店を取材
逗子

逗子市の小学生らが、自分たちのまちで働く人たちとの出会いの中で働くことの意味を学ぶ「ずしまちクエスト商店街たんけん隊！」が2月23日市民交流センターの主催で行われ、児童20人が市街地の店をまわり取材した＝写真。

参加者は指定されたミッションを果たすべく、薬局、牛肉店、バイク販売店、コンビニなど11の店の歴史や人気商品を4班に分かれて調査。決められた「軍資金」の中での買い物も楽しんだ。

1946年創業の日本茶専門店「川根園」では、店主からおいしいお茶のいれ方や栄養価を学び、「一番売れているお茶は？」「戦争後は儲かりましたか？」などの質問を投げかけた。鶏肉専門店「鳥一」では人気の焼き鳥を頬張り、味もチェック。

取材終了後は、チーム別に新聞づくりに挑戦。メモをもとに、撮影した写真や地図を盛り込んだレイアウトを決め、女子チームはかわいいデコレーションを施すなど、個性的な新聞を約1時間で完成し発表した。

逗子小1年・二村歩くんは「はんこ屋さん21で合鍵の作り方を見せてもらったのが楽しかった。新聞づくりではみんなの意見をまとめるのが大変だった」と振り返る。

企画を運営した「まなび舎ボート」（探求型アフタースクール）の辻義和代表（37）は「商店街をまわることで子どもたちと店がつながり、顔の見える関係ができると良いと思う」と話していた。

（K）